

〈資料紹介〉 守山の御寺 大森寺所蔵の岩井正斎作品について

朝日美砂子

キーワード

大森寺 岩井正斎 御用絵師 名古屋城 障壁画

一 大森寺と岩井正斎

名古屋市守山区の浄土宗興舊山歆喜院大森寺は、尾張二代藩主徳川光友の生母乾の方（お尉、歆喜院。寛永十一年・一六三四没）の菩提寺である。寛永十四年（一六三七）、光友により、江戸小石川の伝通院内に創建され、寛文元年（一六六一）、乾の方の出生地とされる今の地に移転した。

このたび、大森寺第二十六世観誉伸一御住職の御厚意により、御寺宝を拝見する機会を賜った。二代藩主光友はじめ尾張藩ゆかりの書画が数多く蔵される中で、光を放つかのような近世絵画に遇目できたため、ここに紹介したい。

紹介する作品は左記の二点である。

作品①「耕作図」 一幅 □絵1

作品②「十二ヶ月花鳥図押絵貼屏風」 六曲一双 □絵2

①耕作図は、横幅の掛軸で、「正斎」の墨書があり、『詔』『信』朱文連印が捺されている。連印の内上方の印の文字は判別しがたいが、「詔」と読んでおく。

②「十二ヶ月花鳥図押絵貼屏風」は、金箔押しの六曲屏風一双に十二面の花鳥図を貼りこむ押絵貼屏風で、二面に「正斎行年七十二歳筆」の

墨書があり、『正斎』朱文円印と『詔信之印』白文方印の二印がある。二作品ともに箱はなく、大森寺に入った経緯も残念ながらわからない。しかし、落款の形式や印面は整っており、印の朱肉も良質で、正斎という人の真筆として疑い得ない。

では、岩井正斎とは何者か。

画家としての現在の知名度は決して高くなく、その作品が市場に出て売買されることもおそらく稀であろう。しかし、名古屋城についていささかでも知ろうとする者なら、その名は記憶に刻まれている。すなわち、名古屋城に関する基本的文献である『金城温古録』の「御天守編」巻末に、岩井正斎の筆という「遠見絵巻」が写しとられているからである。

この他、江戸後期に当地の文化人によって編まれた随筆類にも、正斎の名を見出すことができる。それらを列挙し、該当部を示しておく。

文献①『金城温古録』第十五之冊 御天守編之七 圖彙部

「遠見繪巻物寫

松平掃部頭勝長卿御好 画工 御附御茶道 岩井正斎筆

原図之詞書に曰、

金城御天守ヨリ 大君四方ヲ御遠覽被為

御目ノ届カセラル、所ヲ岩井正斎二命ヲ伝ヘラレテ

御天守ヲ中央トシテ四方ノ遠景ヲ備ニ御力カセシナリシ真圖ナリト云々

大君ハ 明公御弟掃部頭様後ニ御諡号亮諦院殿」

『金城温古録』は、言うまでもなく、尾張藩士奥村得義が編んだ名古屋

屋城百科といふべき大著である。『名古屋叢書統編』^①における翻刻では、山田秋衛の言葉として下記の文章を添えている。

「秋衛曰、勝長は八代藩主宗勝の六男にして、九代宗睦の弟従四位少将なり。画をよくし、鳳山と号す。又曰、岩井正斎は藩の御茶道に出仕す、狩野養川院に画を学び、当代に盛名あり、勝長の画師たり。」

山田秋衛は、昭和の名古屋の大和絵画壇を代表する画家で、名古屋城や尾張の文芸・有職故実に関する研究家でもあった。ただし『名古屋叢書』では遠見絵巻写本自体の写真掲載は見送られている。

文献② 朝倉正章編『袂草』卷之四^②

「△白菊の衣掛松（中略）稲葉七蔵御目付之節、掃部頭様御絵師岩井正斎に命じて、撥面の図を写さしめ」

『袂草』は、名古屋城下の人物・古物に関する逸話を集めた随筆集。文政二年頃の起筆で、天保までの見聞を事細かに記している。

文献③ 有松庵某編『芳濁集』卷之四^③

「地の部 画家

岩井正斎之墓 逞龍山西蓮寺

碑二曰

大音院覚誓正斎居士

享和元年西三月二日

題註 正斎 狩野家ノ画人」

『芳濁集』（弘化四年序跋）は、尾張の著名人を葬られた寺ごとに連ねるもので、本史料により正斎の没年が明らかになる。また正妻の菩提寺

西蓮寺には狩野派系町絵師であった吉川英信（文化八年没）、美信（天保八年没）父子も葬られており、正斎と交流があったと考えてよい。

文献④ 桑山好之編『金鱗九十九之塵』卷第五十二^④

「新道筋

△画家 狩野家 岩井正斎」

『金鱗九十九之塵』は、名古屋城下の地誌。新道筋（駿河町と東門前町の境）の住人として正斎をあげ、狩野派の画家と明記している。

文献⑤ 白井華陽編『画乗要略』卷三（天保二年・一八三一序）

「岩井正斎 尾張人学狩野氏筆力健勃、

旧名古屋市史編纂時の資料であるいわゆる市史本の中の「名古屋人物資料」（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）には、以上の文献をまとめたと思しき記載がある。

なお明治期の画家の価格表である石塚猪男編『日本書画評価表』（明治四十二年・一九〇九刊）には、五十円と記載されている。^⑤尾張南画の雄である山本梅逸・彭城百仙は百五十円という評価額であり、正斎は彼らの三分の一の額ではあるが、さほど低い評価ではない。

以上をまとめると、岩井正斎の経歴は次のようになる。

①享和元年（一八〇一）、七十二歳以上で没した。よって生まれは享保十五年（一七三〇）以前となる。

②幕府御絵師である狩野養川院（一七五三～一八〇八）に絵を学ぶ。

③住居は、名古屋城下の新道筋。

④八代藩主宗勝の六男で九代宗睦の弟であった松平掃部守勝長

(一七三七)一八二一・号鳳山)に絵師として仕え、また画技を教える。

⑤勝長の命により名古屋城天守から見える四方の景を描く。

⑥勝長の屋敷の襖絵を制作。

⑦茶道方として尾張藩に出仕。ただし藩士名寄類に正斎の記載はなく、どのような待遇であったかはわからない。

正斎が仕えた松平掃部守勝長は、八代藩主宗勝の六男で、九代宗睦の弟にあたる。画技を好み鳳山と号し、正斎に絵を学んだと諸書に伝えられている。このような伝歴から、正斎は、十八世紀後半、すなわち明和・安永・天明年間の、横井也有や内藤東甫など個性豊かな人々が書画や俳諧など多様な文芸を楽しんでいた時代、勝長という当代きつての上流文化人に画家として重用されていたことがうかがわれる。この時代背景と環境を考慮しつつ、実際に作品を見ていこう。

二 大森寺所蔵の岩井正斎の二作品

作品① 「耕作図」 一幅 紙本墨画

本紙縦五十四・九cm 横九十二・七cm

画面中央に、茅葺きの質素な小屋でくつろぐ老高士を描き、傍らに、酒肴らしき小瓶や手堤籠を運ぶ従者を配する大横物。人物の右には蔬菜籠を天秤でかつぎ橋を渡る農夫、左には田に水を入れる竜骨車と田植する農夫を添えている。細部描写は緻密とは言えず正確さも欠くが、職業人物の結髪や着衣は中国式で、竜骨車も中国の揚水機であり、中国の耕作風景を描くことになる。

そもそも耕作図とは、中国南宋の画家梁楷の作とされる「耕織図巻」などの中国絵画に端を発する画題で、為政者に米作りの手順を知らしめ



名古屋城本丸御殿黒木書院二之間襖
「四季耕作図」【田植え】部分

耕作図襖」であり、耕作図の伝統的粉本によって制作されたものである。大森寺所蔵の岩井正斎筆「耕作図」は、名古屋城本丸御殿黒木書院の耕作図と同じような橋上人物や田植えの風景を描いており、大局的には狩野派における耕作図の系譜をひくものとわかる。各モチーフを描く筆使いも、梁楷様を意識した屈曲の多い筆法である。また法量は、表装まで入ると横幅一メートルを超し、町屋ではなく武家の屋敷の大床に掛けられた掛軸と考えられる。

ただし、本作品は、中央に主要人物や家屋を配し両脇上方に添景を置いて豊かな奥行を表しており、江戸後期に量産された狩野派作品の多くが右側に主要モチーフをおく傾向があるのに対し、やや異なる構成と

る鑑戒図の一種である。四季感覚が豊かで米という日本で最重要視された作物を主題にするところから、日本ではとくに好まれ、障壁画、絵巻、掛軸、屏風など様々な形態の作品がある。基本的に漢画系の鑑戒図であるため、現存作品の筆者は漢画系の御用絵師集団であった狩野派系が大半を占め、狩野派における絵手本(粉本)によって同じような構図の作品が描き継がれてきた。近世初頭における代表例が名古屋城本丸御殿黒木書院二之間の四周を飾っていた「四季

なっている。また、高士が酒肴を差し出される図も、本来の耕作図にはない。さらに、人物の表情は、みな楽しげで、なおかつ野卑ではなく品がある。狩野派の絵手本や筆法に学びつつも、その規範からは解き放たれているのであり、ここに正斎の個性を看守することができる。

作品② 十二ヵ月花鳥図押絵貼屏風 紙本墨画淡彩

各本紙縦百二十一・九cm 横五十・五cm

六曲一双の屏風の各扇に十二ヵ月各月の花鳥・景物を描く図を貼るもので、定型的な押絵貼屏風の形式をとる。裏面に修理銘二通が貼られており。寛政八年に仕立てられ、明治四十五年熊田喜平治の寄進により修理され、さらに昭和五年大洋堂星崎賢三によって再修理されたことがわかる。熊田氏とは、名古屋城下の著名な油商で、風雅な屋敷を構え、代々文芸に深い理解をもっていた。

まず現状を記しておこう。顔料の剥落等により植物名が確定しがたいものが多く、画題はあくまでも仮である。

右隻第一扇「御簾に梅花生図」 右に落款あり
右隻第二扇「三日月に鳥図」 左に印のみあり
右隻第三扇「墨竹図」 落款なし
右隻第四扇「水鶏図」 右に印のみあり
右隻第五扇「菊図」 左に印のみあり
右隻第六扇「雪椿図」 左に印のみあり
左隻第一扇「薄に蔦図」 左に印のみあり
左隻第二扇「月下松に梟図」 右に印のみあり
左隻第三扇「野分図（雨中萩図）」 右に印のみあり

左隻第四扇「芦雁図」 右に印のみあり
左隻第五扇「奇石図」 右に印のみあり
左隻第六扇「山帰来に鴛鴦図」 左に落款あり

この十二面のうち、右隻第三扇の墨竹図は、落款がなく紙質も異なる。作風から正斎以降の作と考えられ、本稿の考察対象から外しておく。

押絵貼屏風の場合、各扇（面）の落款は、本来奇数扇では右側、偶数の扇では左側にあるべきだが、現状では定石とは異なっており、落ち着かない。また通常なら雪景が左隻左端（第六扇）に配され、かつ署名が為されるべきであるが、本図の雪景である「雪椿図」には署名がなく、そのためか右隻左端に置かれており、季節がうまく流れない。よって明治以降の修理時の錯簡があると考えられ、季節と落款の配置を考慮した復元案を次に示す。

右隻第一扇「御簾に梅花生図」 右に落款 現右一
右隻第二扇「雪椿図」 左に印 現右六
右隻第三扇「奇石図」 右に印 現左五
右隻第四扇「墨竹図」 現右三
右隻第五扇「水鶏図」 右に印 現右四
右隻第六扇「薄に蔦図」 左に印 現左一
左隻第一扇「野分図」 右に印状左三
左隻第二扇「菊図」 左に印 現状右五
左隻第三扇「月下松に梟図」 右に印 現左二
左隻第四扇「三日月に鳥図」 左に印 現右二
左隻第五扇「芦雁図」 右に印 現左四
左隻第六扇「山帰来に鴛鴦図」 左に落款 現左六

この復元案では、右隻第二扇に「雪椿図」（赤い花を椿としたが、薔薇の可能性もある）が来ることになり異例ではあるが、赤い花が第一扇の花生図と呼応する。また左隻では第一扇「野分図」の萩が第二扇「菊図」の菊と呼応し、第三扇「月下松に梟図」の満月と第四扇「三日月に鳥図」の三日月に呼応する。それでもなお季節の流れに疑念が残るが、それは逆に、本作品がよくある十二ヵ月花鳥図から逸脱しているがために他ならない。

通常の十二ヵ月花鳥図とは、定家詠十二月和歌、あるいはいわゆる季語にならって花と鳥を組み合わせており、梅に鶯、桜に雉、藤、菖蒲と続いていく。本作品十二面の内、最初の「御簾に梅花生図」は御簾に白梅を生けた花生と椿と思われる赤い花を組み合わせるもので、珍しい画題である。「山帰来に鴛鴦図」についても、鴛鴦は冬の景としてよく描かれるが、山帰来とおぼしき植物との組み合わせは珍しい。また身を寄せ合う鴛鴦の夫婦の描写には、通常の景物画にはないほのぼのとした愛情が漂っている。「月下松に梟図」も、秋の満月に照らされた松と梟という珍しい景物を描いており、梟の表情は飄逸で、孤高の楽しさをも同時に表している。さらに「芦雁図」は、雁が真下に落下するという、俳画・狂画風の諧謔的な構図となっている。

「水鶏図」・「菊図」「野分図」・「芦雁図」はよくある画題であるが、「菊図」では二種類の菊を描き分けるなど繊細な観察眼をうかがわせ、「野分図」は強い風と瞬間的な降雨を線と点描と表しており、俳諧にも通じる鋭敏な感覚を示している。

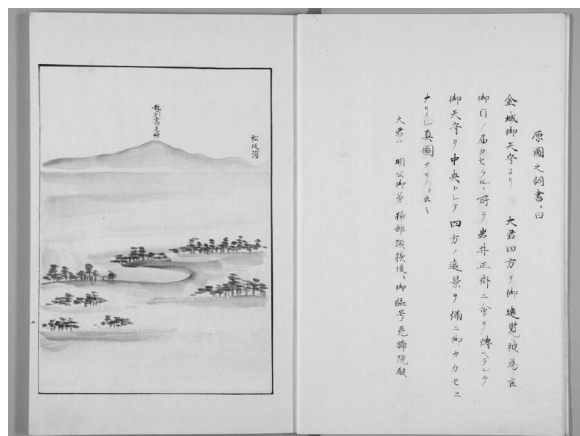
このように本作品は、典型的ではない景物を気ままに取り入れた感がある。また筆法や構図は狩野派を基本にしつつもやや離れ、彭城百川、

丹羽嘉言などのいわゆる初期南画家の筆法にきわめて近い。さらに、生き物の表情は愛らしく、おかしみがあり、下卑た表現はまったくなく。七十二歳という年齢からみても、本作品は正斎の画業の到達点と見てよからう。

次に、本稿冒頭で触れた、「遠見絵巻」にも言及したい。

「遠見絵巻」とは、松平勝長の命により正斎が描いたという、名古屋城天守から見える四方の景観図である。原本は所在不明で『金城温古録』巻十五に収録される写本によって図様を知るしかないが、重要な画績であるので考察しておく。

周知のごとく『金城温古録』には稿本・献上本・校訂本の別があり、



『金城温古録』第十五之冊 御天守編之七 圖景部
名古屋蓬左文庫蔵

当該の巻十五は、稿本が公益財団法人東洋文庫に、献上本が名古屋市蓬左文庫に、校訂本が名古屋市鶴舞中央図書館に所蔵されている。いずれも、水墨と淡彩で描くものである。

そもそも名古屋城大天守五層には、天守を取り巻く山や村を図や文字で示した「天守方角并図」という板絵類が備えられ、歴代藩主が巡見として天守に登ると

きの地名判定の補助とされていた。『金城温古録』卷十三に収録される「天守方角并図」や、宝暦の天守大改装の図面とともに一括して伝世する個人蔵「御天守上見通絵図」と、「遠見絵巻」を比較すると、収録される山や地名にはかなりの異同があり、「遠見絵巻」が先行する「天守方角并図」の類を模写したもので決していないことが確認できる。また「遠見絵巻」では、たとえば近江の伊吹山の茫洋たる山塊や、美濃の岐阜山（金華山）の突き出た山頂など、名古屋から見える近場の山については、特徴的な山容を捉えており、「天守方角并図」類よりはるかに写生的である。ただし「遠見絵巻」は、猿投山などの低山を直下から見上げるように描くなど、視点が一定ではない。一方で、加賀白山、御嶽山、乗鞍岳、飛騨連峰（北アルプス）、富士山など、遠隔地の山々も数多く取り上げられているが、それらは遠くの雪山としてうつすらと描くのみで、概念的描写と言える。おそらく「遠見絵巻」は、部分的には正斎の実写をもとにし、既存の絵図や地誌、名所図会の類を広く参考にしたものと考えられる。

『金城温古録』に収録される「遠見絵巻」の詞書によれば、「天守から勝長が四方を遠覧し、見えた範囲を正斎に命を伝え、備えとして四方の遠景を描かせた真図」という。この文からは、正斎が天守に登ったのではなく、天守から見える範囲を勝長から聞いて描いたとも読める。一方「真図」とは、江戸期は「真景図」を意味する用語として、現在の写生図とはほぼ同様に用いられてきた、また、藩主弟たる勝長の下命であれば正斎の登閣は内々に許されたとも考えられる^⑦。ともかくも正斎は、写生の技量を持ち、また尾張を中心とした地誌に関する知識を有していたと言えるであろう。

では、このような画技と知識を正斎はいかにして身につけたのか。その考察の前に、正斎の画風展開について考察しておこう。

三 画風展開

画風展開を考えるにあたり、まず現存する二作品、すなわち作品①の「耕作図」と作品②の「十二ヵ月花鳥図押絵貼屏風」の作画時期を検討しよう。

作品①の作画時期は未詳だが、署名の書体は相対的に見て楷書風であり、②の署名は行書風である。画家の署名書体は一般的に、若い時期は謹直な楷書風で、老いるに従い手慣れた行書あるいは個性的な草書へ変化することが多い。よって①の署名は、②と比較して若い時期の書体と考えられる。とりあえず、①が②に先行し、時期は幅広く中年期と見ておく。作品②の「十二ヵ月花鳥図押絵貼屏風」は、七十二歳という年紀から、最晩年の作と見られ、先に述べたとおり正斎の最終的な様式と考えられる。

作品①から②への展開はきわめて興味深い。

正斎が狩野派に学んだのは、若年時であったであろう。江戸期の狩野派は絵を学ぶ者の入門編であったとよく言われるが、正斎もおそらく、狩野派の門をくぐり、いくばくかの束脩を渡し絵手本を貸与され、その模写に励んだのであろう。ただし諸書が正斎の師として伝える狩野惟信（一七五三～一八〇八）は、木挽町家狩野七代家当主で幕府御絵師筆頭であり、惟信に直接学べたかは疑わしい。惟信の門人についた程度かもしれないが、また江戸の狩野家ではなく今村家・神谷家のような尾張藩御用絵師、あるいは吉川家のような尾張の町狩野に実際は学んだ可能性もある。

る。^⑧ともかくも何らかの手段で正斎は狩野派正系の画法を学び、①の「耕作図」はその成果と考えられる。

しかし、「耕作図」にすでに漏れ出ているように、正斎には自由闊達な個性と写生力があり、また尾張藩主の血族である松平勝長に重用されていた。その枠にはまらない志向と恵まれた環境から、正斎は、狩野派以外の流派も学んだのではなからうか。具体的には尾張で盛行しつつあったいわゆる初期南画や俳画であり、また当時出版されていた地誌や各流派の絵手本も手にしえたと考えられる。その証拠となる文献記録はなく、また直接的な模倣作品もないが、藩内の上級武士や文化人と交流し、多様な画風や教養知識を吸収したと思われる。逆に正斎という今はほぼ無名の画家が、かかる豊かな環境に身を置いたのであり、十八世紀後半の名古屋城下の文化の厚みと広がりによって驚かされるのである。

四 藩の下命

翻って、この豊饒な文化は、名古屋城とどのように関わっていたのであろうか。具体的にいえば、江戸後期の画壇の多様性が、名古屋城内の御殿や茶室の襖絵や、それらの床の間で折々に飾られる絵画と関係してはなかったか。

名古屋城本丸御殿障壁画が狩野貞信・狩野探幽ら幕府御用絵師であった狩野派の筆頭画人に命じられていたこと、また尾張藩御用絵師の大半が狩野派画人であったことから、本丸御殿以外の城内諸建造物も狩野派系御用絵師による襖絵で飾られていたと考えがちである。筆者はかつて、南蘋派という狩野派以外の流派の画家が江戸時代後期の天保年間、尾張藩御用絵師に抜擢された事実を指摘したが、^⑨それでもなお、障壁画揮毫

や下賜品制作などの藩の公的な作画は御用絵師になってから命じられるものと漠然と考えていた。

しかし実際は、御用絵師であるか否かにかかわらず藩の御用に携わっている事例が多く見受けられ、しかもその流派は多彩である。

たとえば、文政九年（一八二六）十一月十五日、尾張藩十代藩主斉朝が国入りした時、二之丸御殿の諸室や二之丸御庭の茶室は、おびただしい数の書画や道具で飾られ、二之丸御殿の中御座之間には住吉慶舟、梅之間には狩野探信という和漢の幕府御用絵師による掛軸が掛けられたが、御張出には、南画家である山本梅逸（一七八三～一八五六）の「四季草木之画」が掛けられた。^⑩梅逸は、この時四十四歳。京都での画技修行から名古屋に戻ったばかりで、人気が高まりつつあったとはいえあくまでも市井の一南画家であった。御張出に掛けられた「四季草木之画」とは、おそらく四季の花をぎつしりと描き込む大幅で、梅逸お家芸の草花図と考えられ、画風そのものにより花好きの斉朝のお気に召したと考えられる。

おそらく同じ頃、二之丸御庭の茶亭である多春園に、松野梅山（一七八三～一八五七）と東梧斎寛令という画家が襖絵を描いた。梅山は、岩井正斎の門人とされる画家で、遺品は比較的多いが、いわゆる町狩野といわれる市井の絵師である。東梧斎寛令は、一橋家近習番格で狩野融川寛信に師事した小栗寛令（？～一八三七）のことと思われる。同じ二之丸御庭の霜傑茶屋には、東梧斎寛令に加え楠本雪溪（？～一八五〇）という南蘋派画家が襖絵を描いており、作画時期は雪溪が藩御絵師見習に抜擢される天保四年（一八三三）以前にさかのぼると考えられる。さらに着目すべきは、二之丸御殿自体にも梅山、梅逸らによる障壁画が多

数存在した事である⁽¹⁾。これら二之丸御殿・御庭の障壁画については別稿で詳述したいが、江戸後期における名古屋城の障壁画はかくも多様であった。

また下賜品の例としては、幕末の嘉永六年（一八五三）、尾張藩に多額の献金をした豪商富農が下御深井御庭で饗応された際、褒美として下賜された掛軸に、板谷桂意、高倉在考、勝野范古（？）（一七五八）、宋紫石ら、南画、大和絵、南蘋派など江戸・尾張・京都にまたがる諸派による新旧雑多な軸が混在していた⁽²⁾。

このように、藩士名寄の類には記載されない町絵師による障壁画や掛軸が、尾張藩主の周りを飾り、また藩主からのありがたい褒美として町人に下賜されていたのである。

狩野派や御用絵師と町絵師との、名古屋城内における作画場面の区別や変遷については今後の課題としたいが、岩井正斎が「遠見絵巻」を描き得たのは、大局的には尾張藩内での絵画活動の多様性としてとらえることができ、この多様性には藩主の意思も深くかわっていたと考えられる。

本小論の本題である正斎作品の伸びやかな表現が、この多様性に直接結び付く訳ではもちろんない。しかし、尾張の絵画史において忘れ去られがちな正斎にしてかかる闊達な作品を描き得たのは、尾張の画壇の層の厚さを物語るに他ならず、それはまた名古屋城内の御殿や茶室をかつて飾っていた障壁画や掛軸の豊かさとも無縁ではない。江戸時代初期に建てられた本丸御殿の障壁画筆者比定を狩野派の序列と格式により論じることがほぼ通説となっているが、その図式を江戸時代後期の二之丸御殿の空間構想にそのまま当てはめることは危険なのであり、江戸時代の御

殿障壁画全てを御用絵師や狩野派というキーワードから語ることはもとより不可能なのである。

繰り返すが、大森寺所蔵の正斎の二作品は、気品があり、また自由で、個性的である。名古屋の古刹の多くが明治維新や空襲により寺宝を失ってきた中で、大森寺におかれては、尾張画壇の真髄ともいえる作品を今まで大切に保存されてきたことに、改めて敬意を表したい。

註

- (1) 名古屋市蓬左文庫蔵。『名古屋叢書続編』第十三卷（一九六五年 名古屋市教育委員会編集発行）に翻刻掲載。
- (2) 名古屋市蓬左文庫蔵。『名古屋叢書』第二十三卷（一九六四年 名古屋市教育委員会編集発行）に翻刻掲載。名古屋城の樞について「御深井丸之樞 西御堀端より見ゆる樞の大樹あり。此所、元は名古屋庄屋が宅にて、庭前の木にてありしと伝ふ」と記すなど、多彩な記事にあふれる。
- (3) 名古屋市蓬左文庫蔵。『名古屋叢書』第二十五卷（一九六四年 名古屋市教育委員会編集発行）に翻刻掲載。
- (4) 名古屋市蓬左文庫蔵。『名古屋叢書』第六卷（一九五九年 名古屋市教育委員会編集発行）に翻刻掲載。
- (5) 神奈川県立近代美術館（青木文庫）。東京文化財研究所「明治大正期書画家番付データベース」参照。
- (6) 名古屋市博物館・徳川美術館にも別の写本が所蔵されている。
- (7) 『金城温古録』によれば、天守の鍵は厳重に管理されていたが、掃除や風入れのため毎月二回は鍵奉行の裁許のもと同心計十名が最上階まで登っていた。
- (8) 尾張の狩野派と御用絵師については、名古屋市博物館展覧会図録「部門展 尾張の絵画

史 狩野派の画人たち」(昭和六十二年 編集発行名古屋博物館)にまとめられている。

(9) 「尾張藩御用絵師と南蘋派」『名古屋博物館研究紀要』 二三号 一九九〇年

(10) 徳川林政正史研究所蔵「尾州御留守日記」 文政九年十一月十五日条。

(11) 徳川林政史研究所蔵「張出留」および実物資料による。また現存する竹長押茶屋の障壁画は霜傑茶屋のものと考えられる。

(12) 名古屋蓬左文庫蔵「青窓紀聞 卷四十四 上」(水野正信編)・個人蔵「嘉永六年藩侯御招待ノ時ノ記録」による。「嘉永六年藩侯御招待ノ時ノ記録」は、名古屋城西の丸御蔵城宝館企画展「家康とごはん 名古屋城でいただきます」(会期令和五年一月一日～三月五日)で公開。

《Title》

Paintings by Iwai Seisai from Daishin-ji Temple Collection

《Keyword》

Nagoya castle, Iwai Seisai, official painter, Kano school, cultivation drawing, folding screen
Ninomaru Parace, castle tower